

# 月報

<436号>

ケルン・ボン日本語  
キリスト教会  
二〇一七年六月 五日発行

## 乳飲み子のよう

佐々木 良子

私の仕事場兼住居の大きな窓から、豊かな美しい自然を楽しませて頂きながら、ケルンの地で二年目を迎えています。今は一年中で一番美しい季節ですが、青々と茂っている葉は秋には全て落ちます。それは実に見事とも言えるほど、全ての木々は丸裸となりますが、必ず春には眩い新緑を見せてくれます。私が目になっているのは何十年と同じ場所にある木でしょう。日々栄養を取り入れ、古い細胞から新しい細胞を生み出しながら、こうして長い年月の間、存在し続けながら成長していることに思いを巡らすと、感動と共に底知れぬ神秘を感じます。

イースターに洗礼を受けられた、私たちの教会のアイドルYちゃんの成長は、教会の力となっていてます。半年前、初めて教会にいらした頃はバギーの中でスヤスヤと眠っていましたが、今では一緒に礼拝をお捧げして、Yちゃん言葉で元気に賛美をささげています。このような頼もしい成長を皆さんは目を細めながら見守っています。

最近このように自然界、そして教会のYちゃんの「成長」を目の当たりにして思うことは、人々に大きな希望と活力・影響力を与えているということだと思います。しかし、傍観者としてだけではなく、もう既に年齢を重ねている私たち自身も成長し、この存在を

通して廻りの方々に感化を与えることができることを聖書は語っています。

『……たとえわたしたちの「外なる人」は衰えていくとしても、わたしたちの「内なる人」は日々新たにされていきます。』(コリントの信徒への手紙一・四章一六節)と記されているように、信仰者は天の御国に帰るまで成長し続けています。この時も現在進行形です。

バプテスマを受けて新しく生まれ変わった信仰者は皆、霊的な幼子です。神様と人間の関係も親子関係と同じで、親が幼子の成長を期待する「よう」、主は私たちの信仰が幼子から大人へと霊的成長を望んでおられます。

「生まれただけの乳飲み子のよう」に、混じりけのない霊の乳を慕い求めなさい。」

(ペトロの手紙一・二章二節)

生まれたばかりの乳飲み子は、お母さんが与える乳が何よりも頼りです。命を繋げるために欠かすことのできないものですが、それだけではなく自分のことを温かく抱きしめてくれるお母さんの目をじっとみつめ、お母さんの胸の鼓動を聞きながら安心感と愛情に包まれながら成長していきます。そうしてお母さん側も最高の幸せを我が幼子から与えられていることを感謝しつつ育てていくのではないのでしょうか。乳を与える側も受ける側もこの上ない喜びを感じている時でしょう。

私たちの関係も主の御手に抱かれながら、恵みの御言葉を慕い求めることにより命を養って頂きます。同時に主に信頼して下さっている私たちの姿を主は喜んで見守って下さっています。御言葉を「慕い求めなさい」とありますが、これは生半可な求め方ではなく、強烈な渴望状態を表す言葉で、「御

言葉がないと生きていけない！ 生きるためにはどうしても不可欠！」という強い意味合いです。

私たちの人生は様々な経験を積みながら、知識を得て成長していくものと思いがちですが、一生どんなに努力しても、主の御心「御言葉がなければ命を得ることもできませんから……更に突き詰めて言うならば、「神様は私に何を望んでおられるか」と聞くことです。そしてその御言葉に生きてみて初めて、御言葉のすばらしさを味わう事ができ、私たちが知らない真理を発見する感動が与えられます。

「学べば学ぶほど何も知らない」ということが分かるようになる。何も知らないと分かるようになるほどもっと学びたくなる。「物理学者であるアインシュタインの「無知の知」という名言です。深い真理ですね。私たちは色々なことを分かっているように思いがちですが、本当は知らないことだらけという事を知ることが出来る信仰者は幸いです。御言葉によって日々経験したことのない真理を発見し体験すると、もっと知りたいと欲が出てくるものです。

このようにして御言葉を生活の中で実行していく時に、主イエスと出会いながら目が開かれて、大人の信仰へと整えて頂いています。私たちはいつも自分中心に物事を考え、自分に都合の良いことをしたいと願いますが、自分中心から「神さま中心」へと方向転換していった時、大きな飛躍があります。そのような私たちを主は微笑みながら、日々喜んで御言葉の乳を与えてくださっています。乳飲み子のごとく主の御言葉によって成長させて頂き、廻りに感動と感化を与えられる信仰者になることができたら幸いです。



『洗礼を受けて』

張谷 麻帆

私と息子の有振は二〇一七年四月一六日イースターの日に洗礼を受けました。洗礼式を支えてくださった教会の皆さま、佐々木先生には大変感謝しております。

私は洗礼式を一度も拝見したことがなかったため、流れをご説明いただいたとはいえ、なかなかイメージが掴めませんでした。また、息子もまだ生後六ヶ月でしたので、式の最中に泣いてしまうのでは、水が怖くて嫌がったりしないかと、少々不安もございました。ですが、当日は皆さまのサポートもあり、息子は一切泣くこともなく、笑顔で洗礼式を終えることができました。

私は今回、洗礼を受けられて本当によかったと思います。異国に住む身として「神様が共にいてくださる」ということは、大変心強いものだと感じております。私は神様との出会いによって、毎日の生活の中の、悩みや不安であったことが、とてもちっほけなものであり、これらは神様によって救われるのだということを知りました。住み慣れた日本とは違った環境で、大変なことや、なかなかうまくいかないこともございますが、「神様が助けてくださる」「見守っていてくださる」と思えることは、本当に救いであると思います。常に、神様が手を差し伸べていてくださることを忘れずに、これから歩んでいきたいと思っています。

私は夫と出会うまでは無宗教でした。そのため、キリスト教についての経験や知識は浅く、勉強している最中です。現在、週に一度の聖書の勉強会に参加させていただいております。子育てをしながらということもあって、なかなか聖書をひらく習慣を身に付けることができません、このような機会をもうけてくださり、大変感謝しております。

この勉強会への参加は、私がドイツに来てから始め

たことです。日本にいた頃は、仕事の休みも不規則なため、日曜日に教会へ行くことも、ままなりません。今回、ドイツに来ることになったのも、こうして勉強会に参加し、洗礼を受け、クリスチャンになったのも、全て神様のお導きなのだと、しみじみ感じております。この学びの時間を大切にしながら、神様のこと、イエス様のこと、聖書のこと、信仰について理解を深められるよう、これからも学んでいきたいと思っております。まだまだ、分からないことだらけですが、今後は少しずつでも教会の活動に参加できたらと思っています。

至らない私に洗礼を授けて下さった神様、佐々木先生をはじめ、教会で日々お世話になっている皆さまに心から感謝しております。また、教会との出会いを導いてくれた主人にも、感謝の気持ちを伝えたいです。これからも良きパートナーとして、意義のある人生、信仰生活を共にしていきたいと思っております。私の信仰生活は始まったばかりで、まだ生まれたばかりです。ここからが始まりであり、これからを歩んでいくに、神様の教えを日々噛みしめていこうと思っております。これから、神様が私たちに伝えようとしてくださったことを知っていききたいです。

また、今回息子と一緒に洗礼を受けられたことも、とても嬉しく思っております。今はまだ意思疎通も出来ない幼い息子ですが、これから成長して、色々なことがわかるようになったときには、私からも神様について少しは教えることができるようになっていたいです。新しく生まれ変わったつもりで、これからの人生を神様と共に生きていきたいと思っています。

最後に、もう一度皆さまに感謝の気持ちをお伝えたいと思います。本当にありがとうございました。皆さまに、神様の守りと祝福が豊かにありますように。イエスキリストの御名によって、お祈りいたします。アーメン。

『新しい地での再出発』

張谷 延河

シャールーム！主の平安が共にありますように。この度はケルン・ボン日本語教会へ正式に転入することになり感謝いたします。昨年の九月、突然ドイツ駐在が決まり、言葉も文化もわからない地で、新婚の妻と生まれたばかりの子どもとの新しい生活が始まりました。今思えば、大変な事もありました。

しかし、全てを神様に委ね、礼拝とお祈りをした結果、こんなにも早く、そして私の転入と共に、妻と子どもが洗礼を受け

る事ができました。神様について何も知らなかった妻を導き、聖書に基づく指導を惜しまなかった佐々木先生と、慣れないドイツの地での生活を助けてくださった教会の皆さまに、深く感謝いたします。これからイエス様の後を追って行きたいと思っております。



◇ 報告 ◇



六月一日(日)に行われた野外礼拝には、ママの子育ての学び会に出席されている方々、お子さん、ご家族などがたくさん参加してください、爽やかなお天気の下、楽しい恵みのひと時を過ごすことができ感謝いたします。

## 第三六回キルヘンタークに参加して

ドレーアー京子

マルティン・ルターが一五二七年「九五ヶ条の論議」をヴィッテンベルク城教会の扉に提示してから今年で五〇〇年になる。ドイツではそれを記念してルターと宗教改革に関する展示会や催し物が各地で行われている。二年に一度開催されるキルヘンタークも、今回初めて二つの都市、ベルリンとヴィッテンベルクが会場となった。二〇一七年キルヘンタークの標語は、創世記一六章一三節「あなたは私を見ている」である。この標語が大会期間中の礼拝、聖書研究、またその他の催し物の中心となっている。

五月二四日から二七日まで、ベルリンのメッセ会場、市内の教会や公共施設、そして広場等で、礼拝、聖書研究、講演会、ディスカッション、ワークショップ、コンサート等が開かれた。二八日はヴィッテンベルクにおいて最終礼拝があり、車、電車、バス等の交通手段を使ってエルベ川沿いにある草地に参加者が集まった。(新聞記事によると当日は約一二万人の参加者があったそうだ。)

ベルリンとヴィッテンベルク以外に、ルターの足跡をたどる「旅するキルヘンターク」と題して、他の都市でも様々なイベントがあった。ルターが生まれ、そして亡くなった町アイスレーベン、大学生活を送ったエアフルト、その他にマクデブルク、イエナ、ワイマール、デッサウ・ロスラウ、ライプツヒヒ、ハレ。宗教改革の歴史を生き生きと経験し、古い文化都市を再発見する、また、町の教会で音楽を聞きその靈性を感じる、等を目的としている。最終礼拝への参加も旅の一部として企画したのかどうかは知らないが、ヴィッテンベルク駅から礼拝会場まで徒歩で約一時間かかったシャトルバスは遠くの駐車場と会場を往復していたので、私たちは使うことができなかつた。三〇度を越す暑さの中でアスファルトの道を一時間歩くことは少々きつかったが、会場に立てられた十字架が見えた時、

そして、すでに席について音合わせをしている四〇〇人以上の信徒からなる吹奏楽団を見た時、「ああ、やって来た」という達成感を味わった。

キルヘンタークに参加して感じた事は、いたるところに音楽があったということである。ディスカッションや講演会では必ず二度か三度音楽が間に入った。また、コンサート以外に皆で歌う会が毎日開かれていた。市内の教会でテゼのタバがあるを知って行ってみたが、午後の青少年の部が終わっていなかったので教会の前で一時間待つことになった。入り口で渡された賛美歌のコピーには、テゼの歌集から二〇曲が選ばれていて、私知っていた曲もあった。「歌は年齢や宗教の違いを超えて共同体を作る」、「讚美歌は祈りである」という事を聞いたことがある。何度も何度も繰り返し歌う中で、みんなと一緒に祈りを分かち合えたような気がした。ヴィッテンベルク郊外にある草地で行われた最終礼拝で、聖餐式が執り行われた際の事だが、「パンとぶどう酒を持った人が皆さんのもとへ行きますので待っていて下さい」と言われた。三人目の人が白樺の枝を高々と持って一緒に歩いているので、どの方面を歩いているのかは分かるのだが、いったい私のところへ来てくれるのだろうか、それともこちらから向かって行った方がいいのだろうか、と考え始めた。するとある男性が、「皆で輪になってパンとぶどう酒を待とう。グループになった方が目に付くだろうから。」と提案した。一人ほどの人が丸く輪になってパンとぶどう酒を待ち、そして一緒に聖餐にあずかった。その輪の中で、心に通う何かを感じたのは私だけだっただろうか。

最終礼拝の説教を担当された南部アフリカ聖公会のタバ・マクゴバ主教は、「あるグループにとって何がベストなのかを話し合うのではなく、地球上の全ての人々にとって何がベストなのかを皆で話し合い、皆で決めて行かなければならない」と話された。ピラミッドの頂上にいる少数の人々の豊かさの為に、その下で何億という人が喘いでいる事を私達は忘れてはいけ

ない。私達に何ができるのか、問い続けてゆきたいと思う。「マルティン・ルターの宗教改革は、宗教だけの出来事でも、また過去の出来事でもなく、現在の私達の道しるべ、今後五〇〇年の道しるべである」というマクゴバ主教の言葉が心に残った。

## カタリーナ・フォン・ボラ(ルターの妻)

藤井 弘子

この春私たちは、地元の教会主催の『ルターの旅二〇一七(宗教改革五〇〇年を記念して)』に参加した。平均年齢の高さを考慮した、ゆったりと程よい旅、と思って参加したが、内容の濃い充実したもので、毎日新しい知識で頭が一杯。五〇〇年前の出来事だというのに生き生きと当時の様子が語られて、旅が終わる頃には登場人物たちと随分親しくなった。

ルターについては非常に沢山の資料が残されている。私の知りたかった、ルターの奥さんケーテ(ルターはそう呼んでいた)については直接的な資料は殆ど無いものの、ルターが友人に書き送ったもの、テープルスピーチ、メランヒトンとかクラナツハ夫妻を始め、ルターハウスに出入りした大勢の親しい友人たちの文章にケーテについてのものが少なからずあること、近所に住み、聖壇画、改革派の人々の集団肖像画やルター一家の肖像画等、精力的に宗教改革に参加したルークス・クラナツハ(父)の絵によって、今日私たちが彼女について想像する事が出来る。

出生:カタリーナフォン・ボラは、一四九九年に、余り裕福ではない貴族の家に生まれた。当時よくあったように、父は五歳ぐらいの彼女をブレーナの修道院立の寄宿学校に入れる。六歳の頃母親が亡くなり父は再婚、九一〇歳頃にニンフシエンの修道院に入る。女に教育は要らない、子供を産み、育て、家事ができれば充分、という時代に修道院では信仰生活(神への忠誠)の他読み書き、ラテン語、音楽、菜園の世話、時には数学なども教えたらしい。唯一女が学問の出来る

場所でもあった。

この修道院の院長はカタリーナの母方の親戚であり、父親の妹も尼僧として居たので、父親には安心して託せたのだらう。

尼僧たちは免罪符に対する反論、質問、要求を掲げる。それが修道院内でこっそり回覧されていたり、町での改革者たちの講演のウワサによって信仰について自分たちで考え始めていた。その中で悩み抜いたカタリーナがルター博士に助けを求める手紙を送ったのだ。

一五二三年のイースター前夜、二人の尼僧は密かにカタリーナの部屋に集まり一二時の鐘の音を合図に窓から脱出。馬車の空樽の間に身を潜め、夜の道をヴィッテンベルクへと向かう。

脱出したカタリーナたちはヴィッテンベルク市長フイリップ・ライヘンバッハの家に逗留。ルターやメラニンヒトン等同志と牧師たちは尼僧たちの家族と連絡を取り、故郷に送り出したり適当な男性と結婚させたりしたが、カタリーナは最後の一人となってしまう。

最後の候補者を、後には周囲も認めた彼の欠点を素早く見抜いたカタリーナは断った。それを聞いたルターは『どんな悪魔が彼女と結婚したいと言った。それなら当分の誰かが現れるのを待つしかない。』と思っただと伝えられている。その時の相談相手に『こうなったら、貴方ご自身がルター博士しかない』と付け加えたところから、カタリーナがルター博士に求婚した、というウワサが広まった。

『ルターはカタリーナを愛していない』とか、伝統破りの二人を中傷するウワサも流された。

愛する子ども二人を神の御許にお返ししたときも不信仰に陥らなかつた。生涯を通じて二人は一致して神と人とに仕えた。二人は、経済的欠乏、ペスト、子どもたちの死を経験するが、戦争難民の受け入れも行い、「神は困難も与えられるが、それを逃れる道も必ず備えて下さる」をモットーとして生きた。

当時多くの大学教授にとつて学生を下宿させること

は悪くない収入源であったが、ルター夫妻は貧しい学生には奉仕(家事手伝い、引き取っている孤児たちの家庭教師、その他)をすることで下宿代を無料とした。家計は常に火の車だったので、カタリーナは領主や金持ちに寄進を願いお金を工面しては近所の空き地を買い、野菜作り、牛、豚、羊、鶏等を飼い、川で魚を釣り食料供給に努めた。布用にハンフを育て、僧院に残っていたビール製造施設を復活させビールも醸造した。カタリーナは本当に良く働いた。

三男三女に恵まれたが、生後間もない(八ヶ月)長女エリザベスの死は特にケーテを痛めつけた。号泣するケーテを前に、ルターは「ケーテも唯の女だった。男の私が泣くとは(意外だ)」と思つたそである。後に次女のマグダレーナは二歳で天に召された。夫と妻が共に神に信頼を置かなければ、とても堪え難いことだったらう。

「もし私がもう一度結婚するとすれば、従順な女を石でつくるよ。そうでもしなければ、女に従順を望むのは無理だ。」とか「私は君に私の妻をドイツ語教師に推薦するよ。彼女はこも雄弁だ。その点に関しては、彼女は私よりずっと優れている。」あるいは、「私は私のケーテを全フランスとも、ベネチアとも取り替えたくない。神は私に彼女を下さつたし、彼女に私を与えられたのだから。」というルターの言葉が残っている。

ケーテは女性で唯一、ルターの講義・訪問客の部屋に同席を許されていた。ルターが彼女の能力を認め尊重していたことが分かる。

宗教改革五〇〇年を目標にドイツが国を挙げて取り組んで来たキリスト教信仰の大切なエポックに、現地で直に触れられた幸いを感謝しつつ。

Katharina von Bora (1499 - 1552)  
Martin Luther (1483 - 1546)

◇ 予告 ◇

新しい集会のお知らせ 八月より今までの第四日主日賛美礼拝は、子どもと合同礼拝となります。気軽にお子さんを連れておいでください。時間は一四時からです。

大人と子どもの合同礼拝 七月二日(日)一四時 特別賛美 尾畑真知子姉

Strassenfest (教会通りのバザー) 七月九日(日) 一一時一五分よりボンハッファー教会との合同礼拝後、礼拝堂前に日本食コーナーを出店してバザーに参加します。

欧州キリスト者のつどい(場所: ライプツィヒ) 八月三日(水)〜六日(日)

◇ 編集後記 ◇ 「一味違ったキルヘンターク」 佐々木良子

・希望した訳ではありませんでしたが、滞在中は大会本部のお心遣いにより、日本語のできるドイツ人のC氏宅をホームステイ先に選んでくださいました。その他、様々な事柄に敏速に対処して頂き、大規模な集会にも拘わらず、きめ細かな配慮に感動しました。

・滞在中に何と転倒し足を痛めた為、閉会礼拝の会場までの長い距離を歩くのは困難だったので、参加を諦めました。ところが教会員の方々の手助けにより、身体の不自由な方々の為のバスを利用できることが分かり礼拝を守る事ができました。多くの方々の愛に囲まれました。

発行:ケルン・ボン日本語キリスト教会役員会  
Japanische Evangelische Gemeinde  
Köln-Bonn e.V.  
〈主日公同礼拝〉  
会場: Dietrich-Bonhoeffer-Kirche  
住所: An der Decksteiner Mühle 1  
50935 Köln (Lindenthal), Germany  
電話: 0221-4300319 (礼拝前後のみ)  
時刻: 毎週日曜日 14:00-15:00  
〈牧師〉 佐々木良子 (Pfr' Ryoko SASAKI)  
牧師館: Breslauer Str. 26, 50858 Köln  
固定電話: 02234-9298792  
携帯電話: 0151-2910 6278  
Email: r310130s@yahoo.co.jp  
〈ホームページ〉  
http://koelnbonn.jp  
〈振込口座〉  
IBAN: DE97 3601 0043 0587 6034 38  
BIC: PBNKDEFF